

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部 創立10周年に寄せて

20

多感な青春時代に深く
刻み込まれた記憶は消え
ることはない。昭和三十
二年四月、矢作の生出を
離れ、盛高等学校の寮生
活が始まった。いまの農
協会館のある場所だ。

北の山並みの一番奥
に、ゆったりと横たわる
山があった。それが、古
くから人々の生活と結び
ついている霊峰・五葉山
であることを後で知っ
た。

寮から望む五葉山の稜
線は、時に季節の変わり
目を教えてくれた。白い
雪で輝く稜線は厳しい冬
の到来を告げ、風薫る時
期には自然界の息吹を感
じさせた。

便局勤務時代、上有住の
風景、特に気仙川の写真
を主体にロビーに写真掲
示をさせていた。展示を
時には、八日町や恵山
地区の敬老会の様子や上
有住四年祭の写真的展示
もあった。地域の方々に
関心を持って見ていただ
いていることが、展示を
継続する励みとなった。

矢作の生出から上有住
までの通勤時間は、夏場
だと五十分、冬場になる
と一時間はかかった。時
に、朝霧の中に釣り糸を
垂れる太公望を見かける
ことがあるが、出勤時刻
が迫っており、ここ一番
という場面でシャッター
チャンス逃してしまっ
た。

カメラは常に車の中に
積み、身近に置いている
のだが、もう二度と撮れ
ないと思うと無念で仕方
なかった。写真を撮ると
いうことは、私にとって
はその地域への愛おし
さであり、親しみであ
り、そこに生きる人々と
のかかわりそのものであ
った。

写真が結んだ縁があ
る。五葉山麓の樹齢豊か
なブナやナナカマド、ミ
ズナラなど、今まで見た
ことのない驚きの世界を
提示したのは中嶋敬治さ
んであった。

「いつかきくと、私も
五葉山の写真を撮りた
い」。そんな刺激を与え
て余りある写真であっ
た。中嶋さんの写真に魅
了された。五葉山麓の樹
齢豊かなブナやナナカ
マド、ミズナラなど、今
まで見たことのない驚
きの世界を提示したの
は中嶋敬治さんであっ
た。

親子二代にわたって五
葉山麓の巡視員をした上
有住の紺野寿美さんの話
だと、シャクナゲが今ま
で見たことがない見事な
花をつけているという。
初めての登山の一年後、
再び五葉山を訪れてみた
くなった。

平坦な稜線部に広がる
お花畑。私は夢中になっ
てシャクナゲに向かって
駆け出していた。気持ち
も足も不思議と急に軽
くなっている。

一生の宝「シャクナゲ写真」

陸前高田市矢作町 菅野 征一郎

平成十五年七月十三日
の日曜日。絶好の登山日
である。檜山コースを
たどり稜線を目指す。菅
野 征一郎

段の運動不足が足に現れ
る。足が重い。息が上が
る。「峰はまだだろうか」
「あと、どのくらいか」
そのことだけしか頭にな
い。体力の限界だった。

その時だった。緑の群
落が視界に入ってきた。
稜線近くのシャクナゲで
ある。かすかに白い花が
覗(のぞ)く。「もうすぐ
だ。まもなく稜線だ」と
五葉山自然倶楽部の仲間
から励まされ、峰へ出

ニシレー エッセイ

「いつかきくと、私も
五葉山の写真を撮りた
い」。そんな刺激を与え
て余りある写真であっ
た。中嶋さんの写真に魅

了され、上有住郵便局口
のビーに「五葉山写真展」
として展示したところ、
とても好評であった。

五葉山登山をしたのは
郵便局を退職した年、平
成十四年七月上旬のこと
だった。陸前高田市教育
委員会が主催するトレッ
ク大会に出場した。その
ころ、五葉山登山が企画
されていた。

賽の河原、豊石、ササ
の絨毯(じゅうたん)の
上にまっすぐ伸びる白樺
の林が印象深い。中でも
圧倒されたのが、日の出
岩付近の原生林であっ
た。神秘的、神々しさを
感じて魅力的で感動的で
あり、今なお新鮮な記憶
として残っている。

「おいで木炭まつり」の
企画、運営の中核的役割
を担う。もさば口ハス倶
楽部会長。

五葉山のお花畑のシャクナゲ。半世紀に一度とい
われるほどの見事な咲きっぷり＝五葉山自然倶楽
部のシャクナゲ観賞会(平成15年7月13日)



五葉山のお花畑のシャクナゲ。半世紀に一度といわれるほどの見事な咲きっぷり＝五葉山自然倶楽部のシャクナゲ観賞会(平成15年7月13日)